

## 邪馬台国の時代⑩

～夜須をゆく～

河村哲夫

### 夜須郡

前述したように、帯方郡の使者たちは、不弥国(宇美)を出発し、6 キロ南の宝満山麓の竈門神社あたりから邪馬台国の領内に入った。のちの御笠郡——すなわち筑紫の地である。

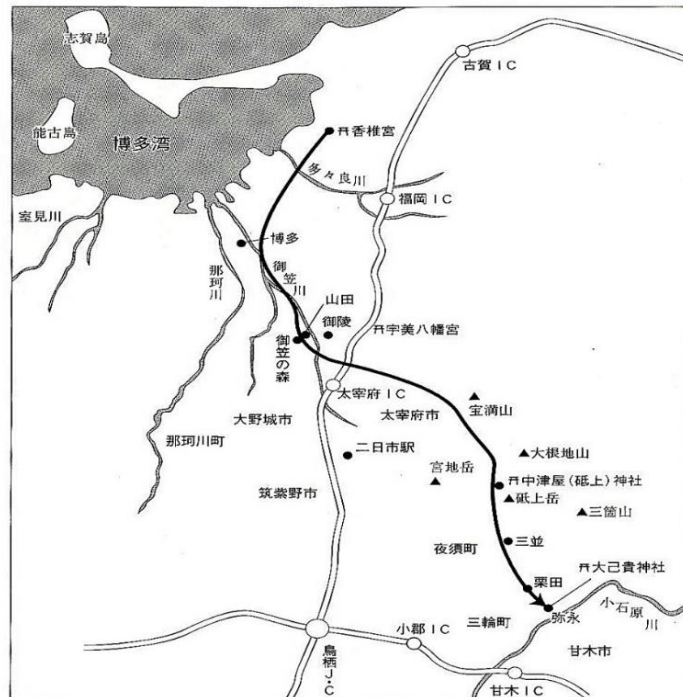
むろん、邪馬台国のこの時代、竈門神社そのものが存在したはずはないが、宝満山麓の見晴らしのいい丘陵地であるため、帯方郡の使者たちの邪馬台国における最初の歓迎・接待の地に充てられた可能性もあり得よう。

竈門神社あたりからゆるやかな坂道を下り、宝満山と宮地岳(338 メートル)にはさまれたなだらかな山道を抜けると、山家(やまえ)川という宝満川支流の小さな川に出る。ここまでが御笠郡で、川を越えると夜須郡になる。

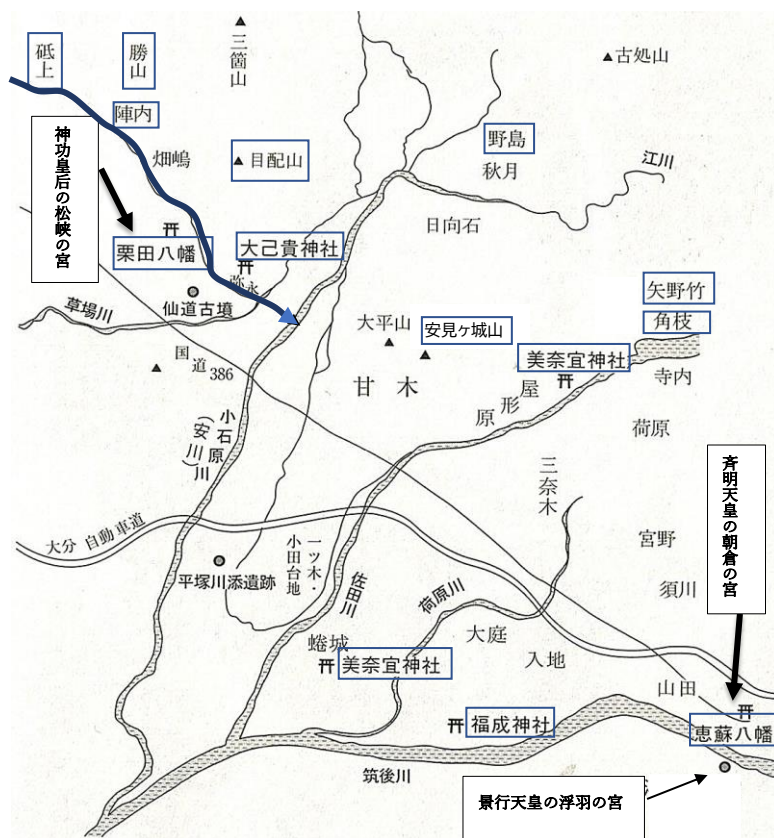
そこからは、左手に大根地山(おおねちやま)(652 メートル、筑紫野市・飯塚市)・砥上岳(496 メートル、筑前町)などの山々を見ながら夜須郡の麓道——いわゆる山の辺の道を進むと、やがて目配山(405 メートル、筑前町)の麓に出る。山家から目配山の麓まで約 9 キロ。

現在、目配山の麓には、神功皇后が創建したと伝わる大己貴神社がある。

何ゆえこの地に大己貴命——すなわち、出雲の大国主命を祭ったかよくわからないが、この夜須郡の地に出雲の神を祭るべき特別の理由があった可能性も考えられよう。



神功皇后の経路(再掲)



□で囲んだ地名は神功皇后伝承地

【詳しくは河村哲夫『神功皇后の謎を解く』(原書房)を参照されたい】

あまり知られていないが、旧夜須郡はそのほぼ全域にわたって弥生時代の遺跡がきわめて濃密な地域である。

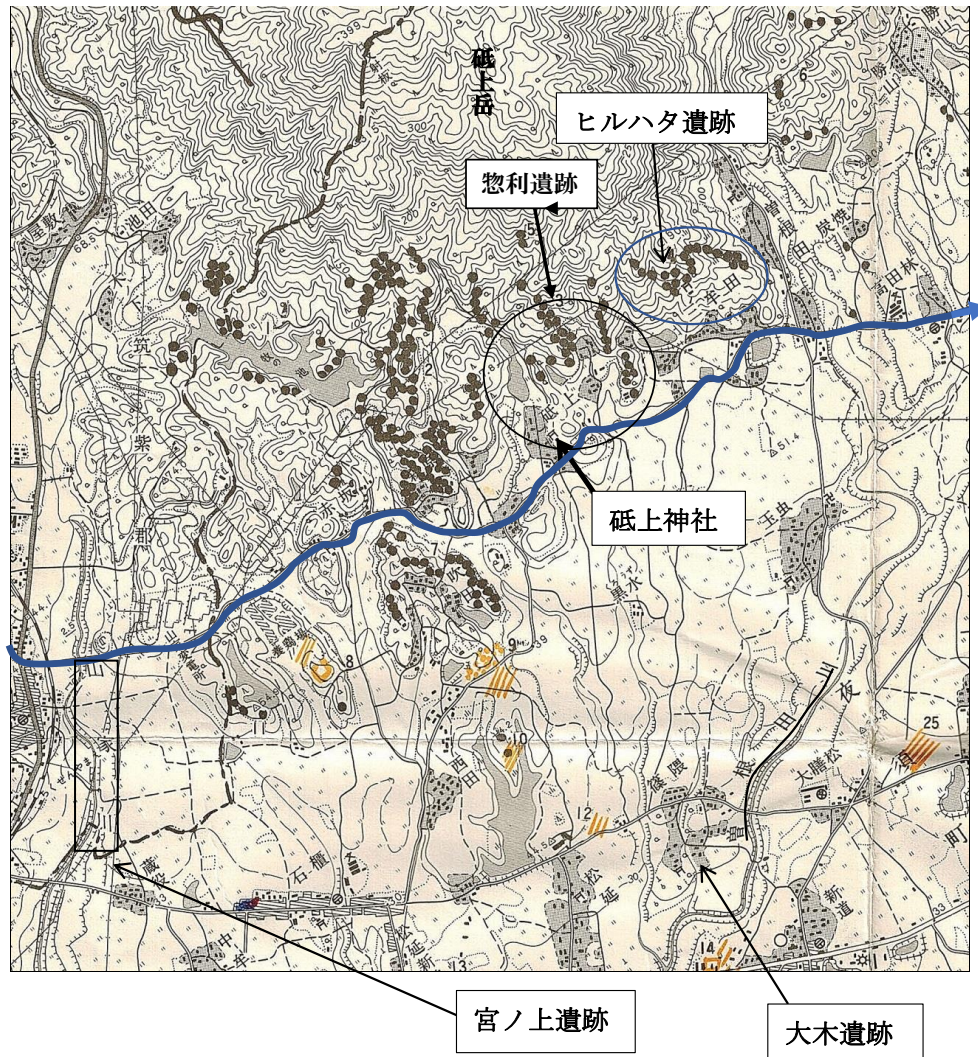
### 砥上岳南麓の膨大なカメ棺群と惣利遺跡

下図は、宮地岳の北麓から山家に出て、旧夜須郡の山の辺の道をたどるコースである。

砥上岳の南麓一帯にかけて、おびただしいカメ棺墓が分布している。カメ棺といえば、奴国の墓制である。

砥上岳山麓から延びた丘陵の先端および谷部にある惣利遺跡(旧夜須町・筑前町砥上)は、弥生時代前期から古墳時代後期の遺跡で、平成六年度に2万平方メートルが発掘され、丘陵上では約250軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、カメ棺墓・古墳など多数の遺構が確認された。また、谷部からは弥生時代から古墳時代にかけての溜池状遺構とともに土器や木器など多量の遺物が出土した。

最上層には古墳時代の扉板を再利用したとおもわれる井戸の遺構や、貯木場跡なども検出された。いずれにせよ、地理的にみて、奴国から直接的な影響を受けた地域といえよう。



### ヒルハタ遺跡(旧夜須町・筑前町三牟田)

竪穴式住居跡 300 軒以上や掘立柱建物跡、周溝などが確認され、弥生後期から古墳時代初頭(2~3 世紀)にかけての集落跡と推定される大規模遺跡である。

したがって、帯方郡の使者たちが通ったときも、この大集落を目にしたはずである。

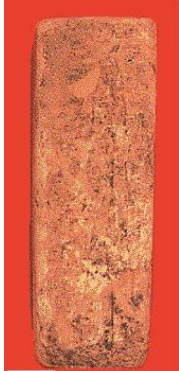
生活に不便な要害の地に造られているため、青銅器の生産など工房集落の可能性も高いとされている。また、鉄鏃(鉄のやじり)などが多く出土していることから、防衛的拠点集落とみる説もある。

### 青銅器の五面彫りの鋳型

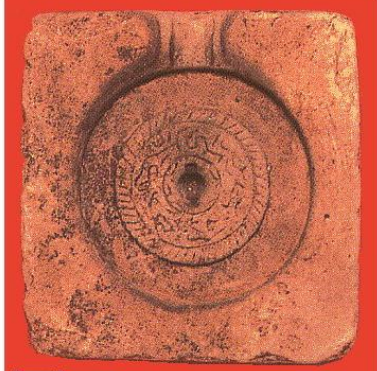
このヒルハタ遺跡の竪穴式住居跡(4.5 メートル×6.5 メートル)の土壇(直径 80 センチ、深さ 80 センチ)から、石英長石斑岩製の五面彫りの青銅器鋳型が出土した。



ガラス勾玉・銅鏡



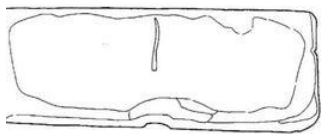
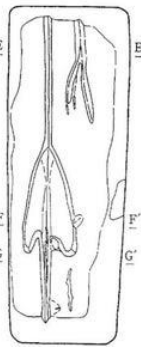
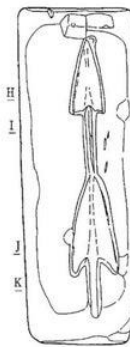
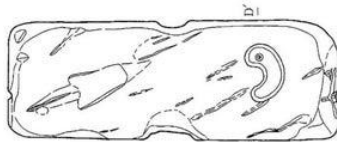
銅鏡



銅鏡

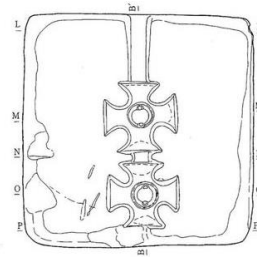


銅鏡





表



裏

### 複数面彫りの鑄型

石製の鑄型は、石材が入手困難だったためか、複数面に彫っていることが多い。

通常は裏表の二面であるが、弥生中期初頭(紀元前2世紀)ごろの吉野ヶ里遺跡出土鑄型は、銅剣3と銅戈1の四面彫りであった。ヒルハタ遺跡の鑄型は、五面彫りの鑄型である。

#### ① 小形内行花文仿製鏡の鑄型(表面)〈国内最古〉

奴国の須玖岡本遺跡群(春日市)で出土した例があるのみで、いずれも弥生後期後半で今回より新しいうえ、摩耗が激しく紋様は読み取れなかったが、この鑄型には中国鏡の銘文の漢字をまねて彫り込んだ擬銘帯がはっきりと残っている。この鑄型に完全に一致する銅鏡の出土はないが、二塚山遺跡(佐賀県神埼郡東脊振村)出土の仿製鏡が最も近いとされる。

#### ② 十字形銅器の鑄型(裏面)〈国内初〉

十字形銅器の製品自体が出土していない珍しい鑄型である品。盾などの飾り金具とみられている。

#### ③ 有茎銅鏃の鑄型2個〈国内初〉

初の出土で複数の鏃を縦に並べた形で鑄造、後から切り離す連鑄式。同工法で切り離す前のは滋賀県などに出土例がある。

#### ④ ガラス勾玉の鑄型〈国内初〉

ガラスの主原料は「珪砂(けいしゃ)」で、地球上のいたるところの土や砂、岩石に多く含まれる物質である。

### 【コラム③】ガラスの製法について

ガラスの起源は紀元前3000年ごろといわれるが、その製法については2説がある。

#### ① 1説:釉薬(ゆうやく)説

陶器を造るときに表面に塗る釉薬は窯で焼くとガラス質となる。これが発達し、単独のガ

ラスになったとみる説。

② 2説:青銅器製作に伴う副産物説

銅を精錬するための土の窯から溶け出した珪酸と燃料の灰や銅の鉱石成分などが混ざり合ってガラスができたとする説。

第2説が有力で、精錬技術が早くから発達していたエジプトやメソポタミアなどをガラスの発祥地とする見方と整合性が取れるとされる。また、メソポタミアからはガラス製の円筒印章が発見されている。それが中国に伝わり、やがて朝鮮半島を經由して日本に伝わったされる。

### 大木遺跡(旧夜須町・筑前町篠隈)

標高 32～33 メートルの低段丘上に立地し、北側を宝満川支流の曾根田川が西流する。縄文時代晩期末から弥生時代中期の遺跡である。

『夜須町史』などによると、昭和 58 年(1983)の発掘調査で、カメ棺墓 102 基、竪穴住居跡 11 軒など多数の遺構が出土した。主体は弥生時代の遺構だが、縄文時代・古墳時代・歴史時代の遺構や遺物もあり、長期にわたる断続的な生活の痕跡をしめす。弥生時代の墓地はほとんどが中期のカメ棺墓で、大半が列状に配されていたという。

- ・竪穴住居跡 11 軒
- ・掘立柱建物跡 3 棟
- ・土坑(貯蔵穴を含む) 36 基
- ・祭祀土坑 9 基
- ・カメ棺墓 104 基
- ・土坑(木棺)墓 8 基

円形竪穴住居 3 軒と方形竪穴住居 1 軒が稲作開始期の夜白式期のものであり、時期的には方形のものが先行するという。

このうち 3 号竪穴式住居跡(第7図)は、径 4.0 メートルの円形で、床面中央の炉に接近して 11 本の支柱穴があり、他の柱穴は周壁の位置に並ぶ。この構造は、先に紹介した糟屋郡の多々良川流域の江辻遺跡とおなじく、韓国の「松菊里遺跡」(忠清南道扶余郡)のものと類似する。



第 7 図 「大木遺跡」 3 号竪穴式住居跡

2号住居跡も円形であるが、ここからは夜臼式土器のほか穿孔具が(第8図)、また7号方形住居跡からは、石包丁(第8図)が出土している。



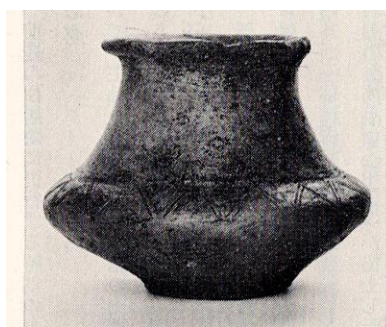
第8図 「大木遺跡」出土石器

石包丁は一穴式で、このタイプは、大島遺跡(筑紫野市)の前期の土壙からも出土しており古いものである。また、調査区の南西において、広い範囲にわたる不整形の土壙が確認されている。

床面は凸凹状をなして、土壙を連結したような形状を呈している。埋土中からは、夜臼式土器片をはじめ、石鎌片、磨裂石鎌(第8図)等を出土したが、遺物は量的に少ない。

円形住居跡の東隣において、主軸を東西にとる8基の土壙墓、木棺墓の一群がある。このうちの2基から副葬の小壺が、別の2墓からは、管玉、勾玉、小玉が検出された。

第9図は、6号土壙墓出土の副葬小壺である。器高7.8センチ、胴部に複線山形文を描いている。外面は、口縁部から底部にいたるまで黒塗りを施し、外面胴部及び口縁部内外面一部に赤彩文の丹が残存している。

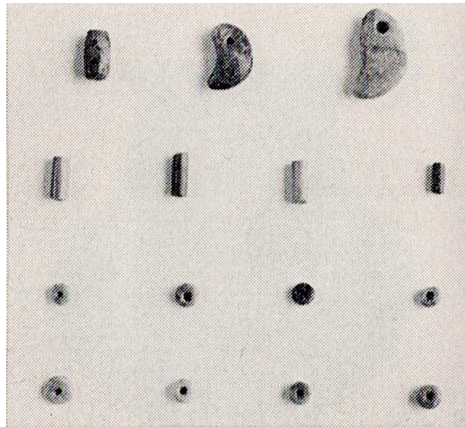


第9図 「大木遺跡」6号土壙墓副葬土器

### 勾玉・管玉

7号土壙墓からは、石製の装飾品類(第10図)が出土した。

勾玉は翡翠およびアマゾナイト(微斜長石)製である。管玉はやや胴太の縄文系のもので閃緑岩とみられている。弥生系のもは碧玉製で、淡灰緑色のもの、暗緑色のものの二種類がある。小玉はヒスイ製である。



第10図 「大木遺跡」7号土壙墓出土の石製装飾品

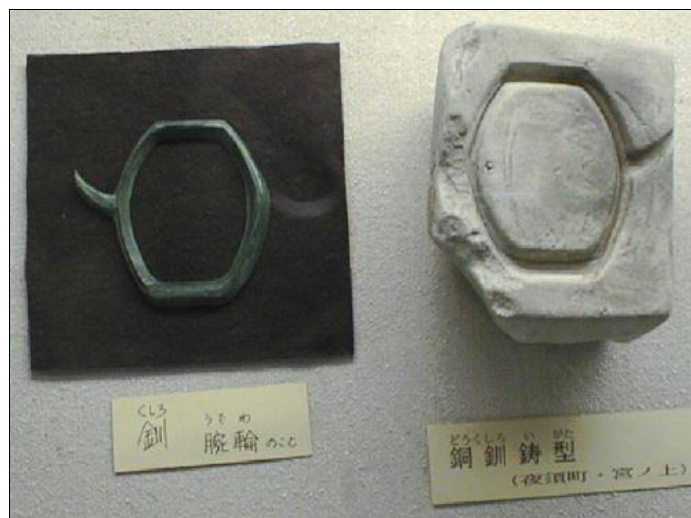
### 農具

石包丁、石鎌は稲などの収穫に用いる道具であり、夜臼式土器に伴って出土したことから、この地域においても、弥生時代前期における水田稲作の開始を物語っている。また、石包丁製作に必要な穿孔具(ドリル)なども稲作文化の伝来とともにセットでもたらされたとみられる。

### 宮ノ上遺跡(旧夜須町・筑前町朝日) AD.1~2世紀

標高30mの山家川左岸の低段丘上に立地する。弥生時代後期の集落跡で、竪穴式住居跡12軒、掘立柱建物跡12棟のほか周溝状遺構等が見つかっている。

有鉤銅釧鑄型は、11号竪穴式住居の覆土中から出土した。時期は出土した土器からみて、弥生時代後期中頃のものと考えられる。鑄型は砂岩系の石材を用い、長辺12センチ、短辺9センチ、厚さ6センチの大きさで、表面の一部が黒変しており、実際に用いられたことを物語っている。環部は一部を欠損するが、上下、左右がほぼ対称の線形を呈し、その大きさは、外縁の長径8.1センチ、短径6.5センチ、幅0.8~1センチ。断面は、左右が甘い「V」字形で、上下は、「U」字形でその深さは4.5~5ミリ。突起部は若干湾曲するが直線的にのび、その長さは1.8センチである。





有鈎銅釧の鑄型は、福岡市の香椎多田羅出土の鑄型に次いで二例目であるが、年代を特定できるものとしては初出のものとされる。ただし、この鑄型から製作された製品は今のところ見つかっていない。

唐津市の「桜馬場遺跡」では、弥生時代後期前半のカメ棺墓の副葬品として、後漢鏡 2 面、巴形銅器とともに 26 個の有鈎銅釧を出土している。

「立岩遺跡」34 号カメ棺墓などと合わせて、弥生時代中期後半から後期前半における副葬品の推移が読みとれる。

すなわち、「立岩」では鉄戈のほか前漢鏡の内行花文日光鏡一面と南海産のゴホウラ製貝釧 14 個が出土したのに対し、「桜馬場」では後漢鏡(方格規矩鏡)と青銅製釧へと変化している。

**【コラム④】釧(くしろ)とは**  
 古くは縄文時代に赤貝、ベンケイ貝等の二枚貝で貝製の釧(貝輪・腕輪)をつくっている。弥生時代中期になると、南海産のゴホウラ貝、イモ貝などの大型巻貝を用いて貝釧をつくっている。  
 弥生時代後期になると、青銅製の釧が北部九州を中心とした地域に出現する。有鈎銅釧とは鈎状の突起を有するのでその名がある。

#### 旧夜須町(筑前町)のおもな遺跡

王墓とみられる東小田峯遺跡(東小田)については、「奴国の時代」のなかですでに紹介し、本稿においても代表的な遺跡を紹介したが、いずれにしても、旧夜須町(筑前町)は下記の一覧表のとおり、弥生遺跡の密集地帯といっている。とりわけ、旧夜須郡西部の曾根田から東小田方向に延びた東西約 1.2 キロ×南北約 3.5 キロ=約 420 ヘクタールの丘陵は、「夜須丘陵」ともいえる中核的な遺跡群である。

時期	時代	旧夜須町	備考
前 4 世紀～	弥生時代前期	城山遺跡(四三島)	有力者の墓に宝器が副葬され始める
前 2 世紀～元年	弥生時代中期	タコシ遺跡(曾根田) 惣利遺跡(砥上) 出口遺跡(東小田) 七板遺跡(東小田) 東小田峯遺跡(東小田) 吹田原遺跡(吹田) ヒエデ遺跡(三並) 迫額遺跡(東小田)	倭は百余国をなす(『漢書』地理誌) 北部九州にカメ棺墓が盛んになる 北部九州に首長が現われる
元年～	弥生時代後期	中原前遺跡(東小田) 琴ノ宮遺跡(三並) たて野遺跡(中牟田) 宮ノ上遺跡(朝日) 浦の原遺跡(東小田) ヒルハタ遺跡(三牟田) 宮ノ前遺跡(曾根田) 下町遺跡(三牟田) 鬼神山遺跡(吹田) 塔の本遺跡(東小田) 江藤遺跡(曾根田)	57 年倭の奴国王が金印を授かる。 170～180 年倭国大乱 239 年卑弥呼が魏に使者を派遣 247 年邪馬台国と狗奴国が対立 266 年壹与(台与)が西晋に使者を派遣
300 年～	古墳時代前期	焼の峠古墳(四三島) 鬼神山遺跡(吹田)	近畿に前方後円墳の造営が始まる。
400 年～	古墳時代中期	鷺尾塚古墳(吹田)	仁徳天皇陵など大規模古墳
500 年～	古墳時代後期	観音塚古墳(砥上)	527 年磐井の乱

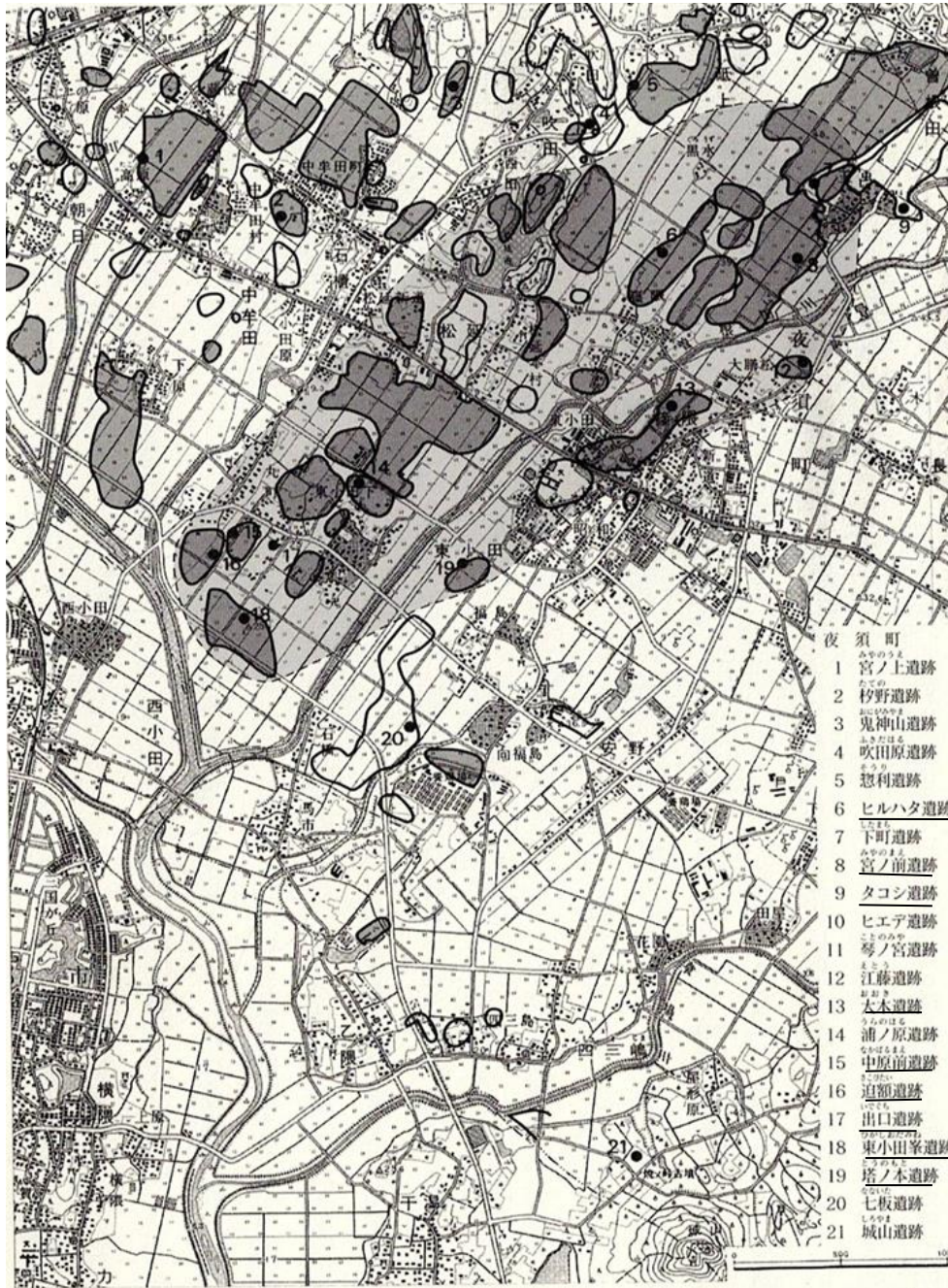


図37 夜須遺跡群弥生後期集落範囲想定図(1/40,000)(註49より転載一部改変)

アミをかけた遺跡は弥生時代後期遺構を含む遺跡。

遺跡の広がりは一北東—南西方向で3.5km、幅は1.2kmと推定される。

『夜須町史』には、

「弥生時代後期になると、あれほどまでに盛行していた甕棺墓は激減し、代わって箱式石棺や石蓋土壙墓(いしふたごうぼ)等が主流を占めるようになる。それは甕棺分布圏内における社会的変動に起因するものと考えられる」

とある。これはきわめて重要な指摘である。

カメ棺は、邪馬台国に先行した奴国の時代の墓制であり、玄界灘沿岸地域、筑紫平野から壱岐や朝鮮半島にまで広まった。

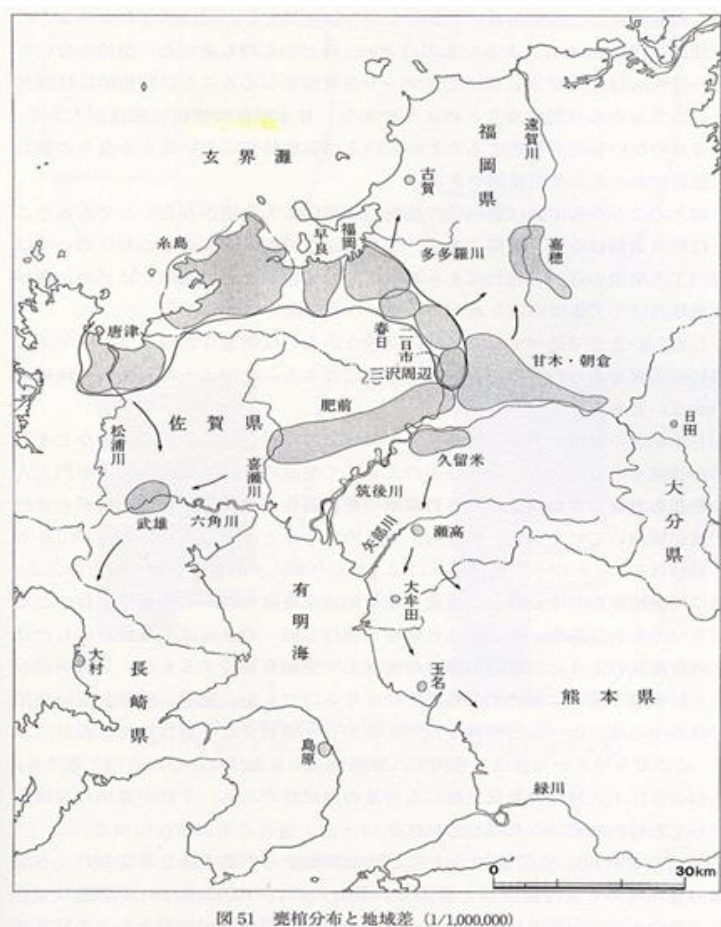


図 51 カメ棺分布と地域差 (1/1,000,000)

もちろん夜須・朝倉・日田地域もカメ棺文化圏に属する。そして、カメ棺のなかに鏡・剣・玉を埋納する習慣も生じた。皇室に現存する三種の神器の制度は、奴国の時代に始まったといっている。

奴国→邪馬台国→邪馬台国は、三種の神器という側面からみれば、継続性を有しているといえよう。しかしながら、

- ① 【奴国＝カメ棺】
- ② 【邪馬台国＝箱式石棺】
- ③ 【大和朝廷＝前方後円墳】

という区分を絶対視することの危険性を理解しておくこともまた必要であろう。

①のカメ棺については、きわめて限定的な範囲の墓制であり、九州の大部分の地域と本州が該当しない。

②の箱式石棺については、箱式木棺や方形周溝墓、土壙墓なども並行的に築造されていることに留意する必要がある。

くわえて、③の前方後円墳については、近畿説において、箸墓を卑弥呼の墓に強引に当てはめようとするあまり、かつては4世紀であったはずの前期古墳が3世紀に前倒しされている。

しかも、その組織力と資金力によるキャンペーンが猛烈に繰り広げられた結果、いつの間にか【邪馬台国＝前方後円墳】説が圧倒的に優勢な状況となっている。

『夜須町史』のようにのんびりと【邪馬台国＝箱式石棺】といってる場合ではないのである。

いつの日か、この連載のなかで、近畿説の欠陥について、まとめて批判をさせていただきたいと考えている。

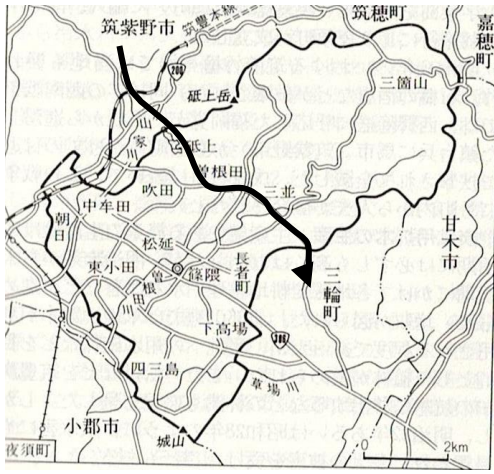
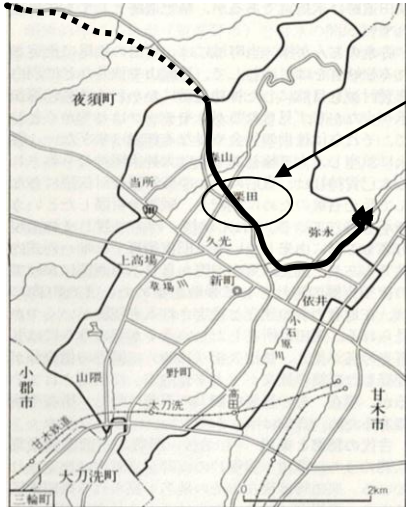
【コラム④】弥生時代の墓の種類

墓名	写真	説明	弥生時代		
			前	中	後
土壙墓		土を掘って棺を使用せずに遺体を埋める墓のことで、古今を通じて普遍的な埋葬方法。 弥生時代にも全期をとおして日本中に見られた。 弥生時代には手足を伸ばして葬る伸展葬が主流で、集落近くの共同墓地に埋葬された。	●	●	●
支石墓		大型の平たい石を数個の支石で支え、その下に土壙墓(墓穴)や箱式石棺墓、甕棺墓などの埋葬施設がある。 支石墓は朝鮮半島に広く分布し、日本では弥生前期・中期の北部九州に多い。	●	●	●
甕棺墓		北部九州では成人に特製の大型甕棺を使用。盛り土はほとんどなく、甕棺は斜めに置かれ、屈葬が多い。 副葬も見られる。楽浪郡に使者を送った王の墓とみられる甕棺には青銅鏡・ガラス・璧など漢からの贈り物が副葬されている。	●	●	▲
箱式石棺墓		板状または塊状の石で四方を開き、遺体を入れる大きな箱形の空間を作り、上を同様の石で覆ったもので、西日本に多い。	●	●	●
方形周溝墓		弥生時代前期から古墳時代まで続く墳丘墓。 約10m四方で、周囲を1~2mの溝で囲む。 盛り土された中央部に土壙(墓穴)を掘って埋葬した。		●	●
墳丘墓		弥生時代の墳丘をもつ墓を、古墳と区別して墳丘墓と呼ぶ。 弥生時代中期後葉から後期前半: 墳丘規模に格差が広がり、墳長20メートル以上の大型墓が出現する。		●	●
四隅突出型墳丘墓		斜面や裾の部分に石を並べ、四隅が突出した形の墳丘墓。墳丘斜面に貼石がある。 島根(出雲)・鳥取・広島などを中心に分布。		●	●

『世界の歴史マップ』弥生時代・墳墓と埋葬を一部修正

## 旧三輪町の遺跡

なお、夜須郡のうち西部が旧夜須町、東部が旧三輪町である。下表はその区域である。いずれも旧夜須郡であったが、明治 29 年(1896)の郡制施行により朝倉郡に編入された。旧夜須町については前述したので、旧三輪町の遺跡について紹介しよう。

旧夜須郡(朝倉郡筑前町)	
旧夜須町	旧三輪町
赤坂・朝日・石櫃・櫛木・黒岩・三箇山 四三嶋・篠隈・下高場・曾根田・長者町 砥上・中牟田・西田・畑島・東小田・吹田 二・松延・三並・三牟田・安野	弥永・大塚・上高場・栗田・高上・高田・当所 野町・久光・森山・山隈・依井・新町・朝園 大久保・原地蔵
	

## 栗田遺跡(旧三輪町・筑前町栗田) BC.1~AD.0

栗田遺跡は、北の朝倉山塊からの河川により形成された扇状地上の低い丘陵(標高約 45メートル)にある。

昭和 2 年(1927)、カメ棺墓から銅矛が出土している。その型式、製作時期は不明であるが、青銅製の武器が副葬されるのは中細形銅矛タイプまでなので、その時期は限定され、弥生時代中期後半代のもものとみられている。

カメ棺についても、中期・後期のものが多い。また、祭祀遺構から墓前祭祀に用いられたとみられる大量の丹塗磨研土器が大量に発見された。

表面に赤色顔料のベンガラを塗り、ヘラで丁寧に磨かれた特別あつらえの品で、とりわけ栗田遺跡の丹塗磨研土器は、その高坏・壺・器台の造形美がすばらしく、弥生時代の祭祀の状況を具体的に示す資料と評価され、カメ棺とともに「栗田遺跡祭祀遺構出土土器」として国の重要文化財の指定を受けている。



#### 栗田遺跡（経田地区）

所在地 朝倉郡筑前町大字栗田字経田（きょうで） （旧三輪町）

この遺跡は、昭和初期にすでに合わせ甕棺（かめかん）や赤色に彩られた高杯（たかづき）・壺（つぼ）類が出土することで知られており、昭和 48（1973）年の調査で甕棺 72 基、祭祀（さいし）遺構 8 か所の遺構が検出されました。

特に祭祀土器は高杯や壺のほか椀（わん）・甕・大形筒形器台などがあり、精製された胎土で赤色に塗られ、表面の内外をていねいに磨いた**丹塗磨研（にぬりまけん）土器**が多量に出土し、墓地に伴う祭祀遺跡として有名です。

これらの出土遺物は、平成 6 年 28 日に国の重要文化財の指定を受けました。

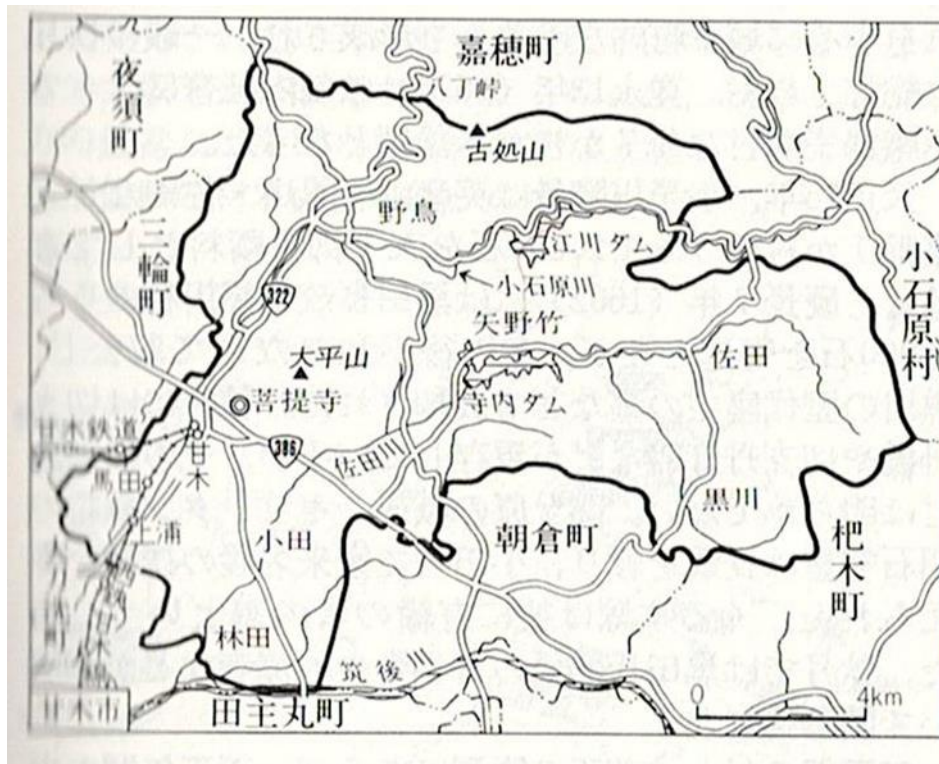
平成 12 年 3 月 31 日 筑前町（旧三輪町）教育委員会

なお、丹塗磨研土器は、すでに紹介した旧夜須町の峯遺跡や七板遺跡からも出土し、筑紫野市の貝元遺跡や久留米市の安国寺遺跡、吉野ヶ里遺跡などからも出土している。墓域内の祭祀遺構から出土するケースが多いが、墓域以外の住居跡内から出土する例もあり、日常の祭祀に用いられることもあったとみられている。

#### 安本美典氏の「邪馬台国甘木朝倉説」

さて、朝倉市(旧甘木市)西部に小石原川が流れている。もと夜須川あるいは安川といった。

西の小石原川と東の佐田川にはさまれた区域が旧甘木市の中心地で、ご承知のとおり、元産業能率大学教授の安本美典氏が長年にわたり訴えつづけられた「邪馬台国甘木朝倉説」の中核的な地域である。甘木市と朝倉町・杷木町が合併し、朝倉市となったため、最近では「邪馬台国朝倉説」と呼ぶ人も多い。



旧甘木市の範囲

これまたご存じの方も多くとおもわれるが、邪馬台国に関して『魏志倭人伝』だけの情報では不十分であり、日本側の『古事記』や『日本書紀』などをあわせ用いる必要があるということを前提にした安本美典氏の長年にわたる主張をまとめれば、次のとおりとなろう。

① 日本神話の舞台は高天原である。

『古事記』『日本書紀』の記す日本神話によれば、天皇家の祖先神である天照大神をはじめとする天つ神は、「高天原」に住んでいた。

② 高天原＝邪馬台国である。

高天原は邪馬台国のことを伝承的に伝えたものである。

③ 古代の天皇の年代は不確かであるが、実在していたことは確実である。

「わが国の古代のことを記した『古事記』と『日本書紀』には天皇の系譜が記されている。したがって、ある天皇が、ある天皇の何代前の天皇かはわかる。しかし、古い時代の天皇については、その天皇が西暦何年ごろの人かという実年代はわからなかった。『古事記』本文はどの天皇のつぎに、どの天皇が立ったかを記しているだけである。『日本書紀』は、神武天皇以下歴代の天皇の記事において、即位をはじめとする種々の事件のおきた年月日を記している。しかし、『日本書紀』の年月日の数字は、たとえば、神武天皇が127歳まで生きたとし、孝安天皇の在位期間を102年とするなど、信頼できない。『古事記』と『日本書紀』とでは、年紀や個々の事実ではかなり食い違いがあるものの、天皇の代数については完全に一致している」

#### ④ 天照大神＝卑弥呼である。

日本神話の伝える天照大神は、卑弥呼のことが伝承化したものである。

#### 理由①：活躍年代の一致

実年代のはっきりしている古代の諸天皇の平均在位年数を約 10 年と算出し、これをもとに統計学的方法を用い、推定の誤差計算をおこないながら古代にさかのぼっていくと、卑弥呼と天照大神の年代が一致する(統計的年代論)。

『魏志倭人伝』は西暦 239 年ごろに女王卑弥呼の使いが魏に貢献したことを伝えている。すると天照大神は 3 世紀半ばごろの女王であったということになる。

#### 理由②：二人の共通点

- ① とともに女性である。
- ② とともに宗教的権威をそなえている。
- ③ とともに夫をもたなかった。
- ④ 卑弥呼には弟がいた。天照大神にも月読命とスサノオという弟がいる。よって、天照大神と卑弥呼は同一人物である。

#### 安本美典氏の「邪馬台国甘木朝倉説」の概要

##### (1)朝倉地方には「甘木」の「天」をはじめとして「天」に関する地名が多い。

日本神話の地名が集中的に残っている。高天の原には「天の安河」が流れ、その河原に神々が集まって会議を開いたというが、夜須には夜須＝安川が流れている。日本神話に「天の香山」という地名がしばしば出てくるが、甘木の近くに香山(高山・旧杷木町)がある。「天の岩戸」に由来するとおもわれる岩屋神社がある。

##### (2)朝倉地方を中心とした北部九州の地名と畿内の地名がきわめて類似している。

発音のみならず、相対的な位置関係もほとんど同じである。

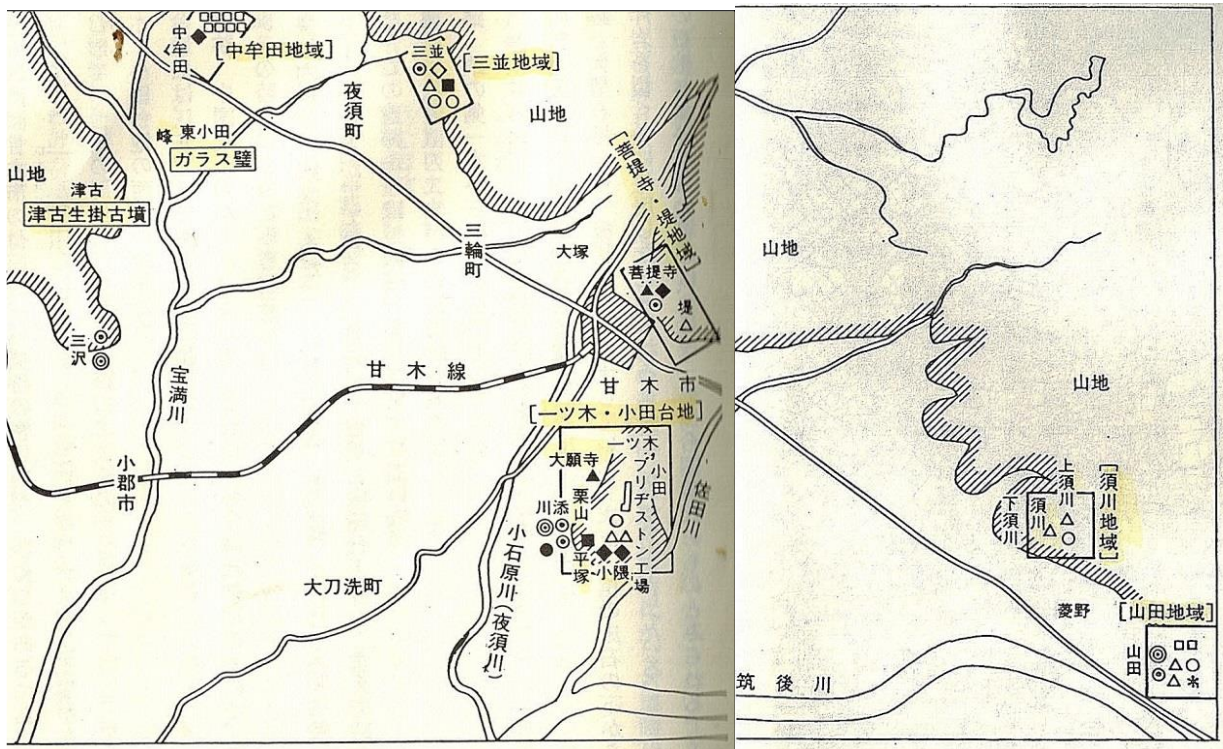
これはイギリス移民によってイギリスの地名がアメリカに移ったのと同じ現象で、九州の勢力が畿内に移った際に、地名も一緒に移ったものである(邪馬台国東遷説)。

##### (3)平塚川添遺跡という大規模遺跡をはじめ朝倉地方には邪馬台国時代の遺跡・遺物が多い。

夜須・朝倉地域には鉄利器や小型紡製鏡第Ⅱ型など、邪馬台国時代の遺物とみられるものがおびただしく出土している。

そして、『邪馬台国への道』【梓書院・平成 10 年(1998)】に安本美典氏は次のような図を掲げられ、旧甘木市を中心とした朝倉郡における邪馬台国時代の遺物の分布について強調されている。





・甘木市付近における、ほぼ確実に邪馬台国時代のものと思われる遺物の分布。  
 (津古生掛古墳 [ガラス璧] は、著名な遺跡・遺物であるが、邪馬台国時代のものとは異なる。)  
 ▲…鉄矛  
 △…鉄剣  
 ◆…鉄刀

- ◇…鉄刀子
- …鉄鏃
- …鉄斧
- …鉄鉈(やりがんな)
- ◎…小形仿製鏡
- ⊙…「長宜子孫」銘内行花文鏡
- …管玉
- \*…鉄片

**平塚川添遺跡**

安本氏「甘木市の中心地の南に、一ツ木・小田台地があり、そこにブリヂストン工場がある。この工場をとりかこむ形で、台地の周辺の部分が遺跡の密集地の一つになっている。平塚川添遺跡は、この一ツ木・小田台地の西の平地部にある」(同前掲書)

平塚川添遺跡(朝倉市平塚)は、弥生時代中期から古墳時代初頭(紀元前1世紀～西暦4世紀ごろ)の遺跡である。まさしく邪馬台国時代に重なる遺跡である。1990年(平成2)に平塚工業団地造成中に発見され、甘木市教育委員会と福岡県教育委員会により発掘調査が進められ、1994年(平成6)5月に国の史跡に指定された。

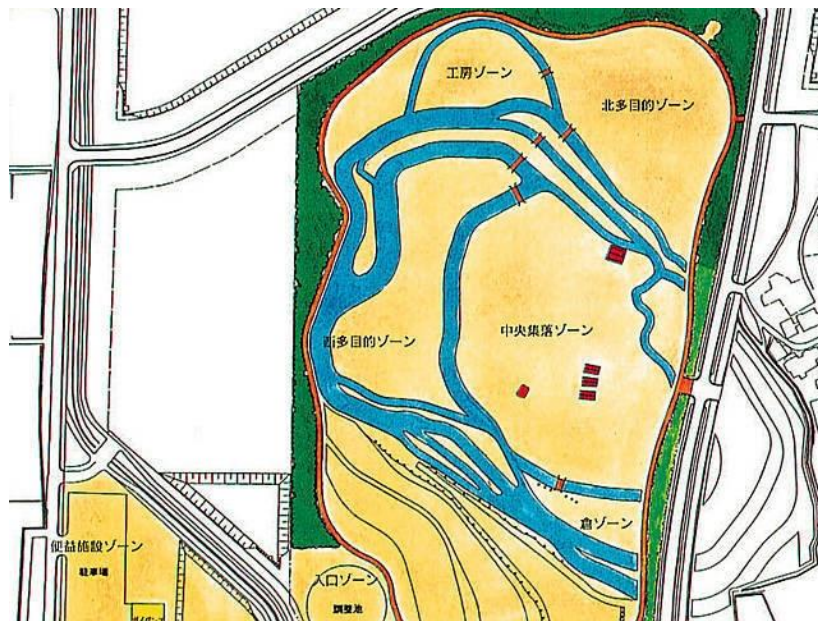
『甘木市史』や朝倉市教育委員会の川端正夫氏の『平塚川添遺跡～低地性環濠集落』(甘木歴史資料館だより No.51(2012年10月2日))などを参考に、平塚川添遺跡の紹介をすれば、おおむね次のようなことになろう。

### 低地性多重環濠集落

筑後川支流の小石原川(夜須川・安川)は朝倉山系から南に延びた台地【福田台地(一ツ木・小田台地)】の西側を南流し、やがて筑後川に流れ込む。

平塚川添遺跡は、その小石原川と一ツ木・小田台地の間の微高地に位置している。

中央集落は東西長約 120 メートル、南北幅約 220 メートルの楕円形で、面積は約 2 ヘクタールほど。遺跡の標高は海拔約 20～21 メートルで、北から南に緩やかに下っている。東側の一ツ木・小田台地からみれば、4～5 メートルほど低地になっている。



## 集落の起源

小石原川右岸の馬田中原台地には有柄石剣を出土した馬田上原遺跡があり、小石原川左岸の一寸木・小田台地には、中国式銅剣が出土した中寒水屋敷遺跡など、弥生時代前期にさかのぼる遺構・遺物が確認されており、弥生時代中期中頃までの土器片も散見されるが、平塚川添遺跡に住居跡が確認されるのは弥生時代中期後半(紀元前後ごろ)になってからという。

東側の区画に3軒前後の竪穴住居つぐられ、中期末にかけて少しずつ西側に広がっていったらしい。そして、2~3棟の倉庫とみられる高床式建物を建てている。

このように、集落の造営方向が東から西に向かうことから、一寸木・小田台地の「出村」「枝村」「新耕の地」「開拓邑」「新墾」のような性格であったと推測されている。

出土遺物としては、大型蛤刃磨製石斧、石包丁、投弾、丹塗土器片などがある。

## 多重環濠集落の成立(後期初頭~後半)

集落がその規模を一気に拡大するのは弥生時代の後期——特に後期中頃(紀元1世紀末~2世紀前半)とされる。

集落は当初の中央集落からはみ出すように西へ北へと拡大し、中央集落を環濠で囲み、さらに幾つもの大溝によって別の区画を形成し、さらに外側に広がっていく。このころの遺物として、住居跡から「貸泉」が出土している。

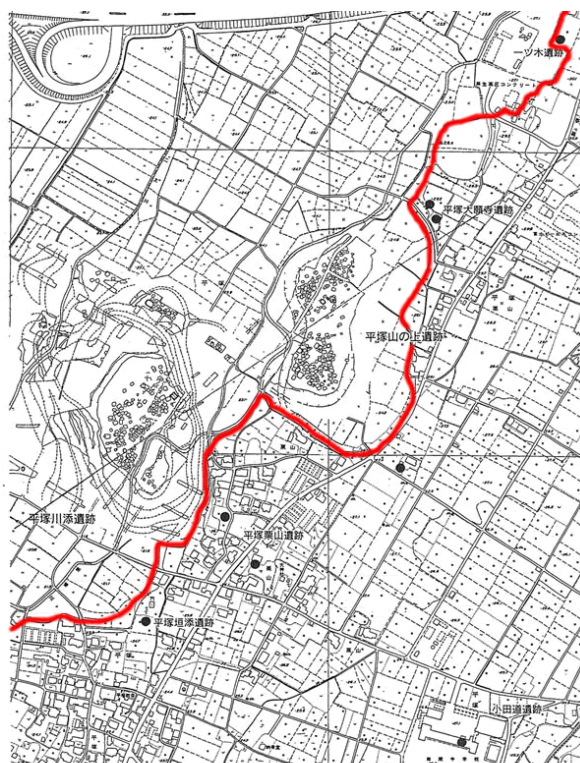
この時期になると、平塚川添遺跡の北東方向約150メートルに位置する「平塚山の上遺跡」の集落が南側から形成されはじめ、以後古墳時代初頭に至るまで、この二つの集落は台地の西側低地に並存し、集落域と台地の縁辺まで入ると、併せて約20ヘクタールほどのまとまりを形成する。

## 集落の最盛期と環濠の埋没(弥生時代後期末~古墳時代初頭)

平塚川添と平塚山の上の集落は、弥生後期末から古墳時代初頭にかけて(2世紀末~3世紀)最盛期を迎える。

弥生時代終末期には、平塚川添集落の多重環濠のほとんどが埋没したが、古墳時代初頭にはその上に竪穴住居や掘立柱建物が作られる。

両集落の竪穴住居の数は、終末期で約100軒、古墳時代初頭期で約150軒となり、環濠埋没後も集落がその規模を拡大している。



第1図 平塚川添遺跡・平塚山の上遺跡、及び周辺遺跡群 (1/6,000)

遺物としては、埋まった環濠上層から「小型紡製鏡」2面、集落内から船載の「長官子孫銘内行  
花文鏡」片1点、住居跡から広形鋼矛耳部片1点、銅鏃4点などが出土している。

### 集落の消滅(古墳時代前期)

このように、平塚川添遺跡は、弥生時代中期後半に集落の形成が始まり、弥生時代終末期から  
古墳時代初頭(3世紀末)に最盛期を迎え、古墳時代前期(4世紀)に突然な感じで、まず平塚川添  
集落が、つづいて山の上集落が消滅し、その後の生活遺物はほぼ皆無となるという。

洪水などの災害によって消滅した可能性もあるが、後の水田化に伴う削平で、当時の生活面そ  
のものが失われているので、その原因は分からないとされる。

前述したように、東の台地上には、4～5世紀(古墳時代前期～中期)の集落が確認されるので、  
台地上に「引き上げた」可能性もあるが、両集落に匹敵するような大規模集落ははまだ確認されて  
いない。

### 旧甘木市(朝倉市)の遺跡

以上が平塚川添遺跡の概要であるが、いずれにしる、一ツ木・小田台地は遺跡の密集地  
であり、『甘木市史』や『埋もれていた朝倉文化』(福岡県立朝倉高等学校史学部)などに基  
づき、その主要なものについて紹介しよう。

#### (1)中寒水(なかそうず)屋敷遺跡

中国式銅剣が一本出土している。ただし、邪馬台国時代よりもずっと前の弥生時代前期のもので  
ある。



(B) 中寒水屋敷遺跡出土剣



(A) 桃氏剣

(A)の銅剣は、北京の「中国歴史博物館」にある銅剣である。中国ではこの様式の剣は、「桃氏剣(とうしのけん)」「(東周式銅剣)」と呼ばれる。

**※桃氏剣**

古代中国・戦国時代から漢の時代に作られた青銅の剣。柄と刀身が一体。柄の頭は漏斗型、鐔は菱形。柄の部分に縄を巻きつけて使用した。

(B)の中寒水屋敷遺跡出土剣の握りが(A)の桃氏剣とそっくりである。

ただし、剣の本体部分は途中で折れて短くなっており、最下部位の漏斗状の柄のつまみも外れてなくなっている。

## (2)栗山遺跡

安本氏「甕棺内から、鉄戈1本がでていいる。また、前漢鏡(内行花文昭明鏡)1面、貝釧(腕輪)32個などがでていいる。これらも、邪馬台国時代よりも、まえの時代のものであろう。また、この遺跡からは、鉄鏃1個が採集されていいる」

栗山遺跡については、本シリーズの奴国の時代の「北部九州のクニグニ」のなかでも、すでに紹介したとおりである。

### ① 前漢鏡(連弧文昭明鏡)

明治17年(1884)の開墾時に石棺や合口カメ棺が発見され、径9.6センチの前漢鏡(連弧文昭明鏡)が出土した。この前漢鏡の現物は不明であったが、昭和55年、福岡市立歴史資料館に持ち込まれた山田正俊氏所蔵の漢鏡と大きさや文様、銘文がほとんど同一であったことから、栗山遺跡出土の鏡とほぼ断定された。

### ② イモ貝輪・鉄戈

大正14年(1925)に近隣の宅地から合口カメ棺3基と石蓋付カメ棺が出土し、11個ずつ2連のイモ貝輪計22個が発見された。イモ貝輪は、昭和37年(1962)の調査でも一連になった11個が出土している。ゴホウラ貝ではなく、イモ貝を用いており、左腕に装着されていたことから、被葬者は女性と考えられ、この地に女王を奉る風習があったことをしめしている。

次いで、破壊されたカメ棺から鉄戈1本が見つかった。

### ③ 平織絹布片・イモガイ貝輪

昭和56年(1981)の甘木市による緊急調査によって、中期中葉のカメ棺内から女性人骨付着の平織絹布片が出土し、中期後半のカメ棺からは左手に装着したイモガイ貝輪などが出土した。

### ④ 水銀朱・絹布

平成4年(1992)の調査によって、新たな墓群の中心部の5号カメ棺から、水銀朱・絹布などが出土した。

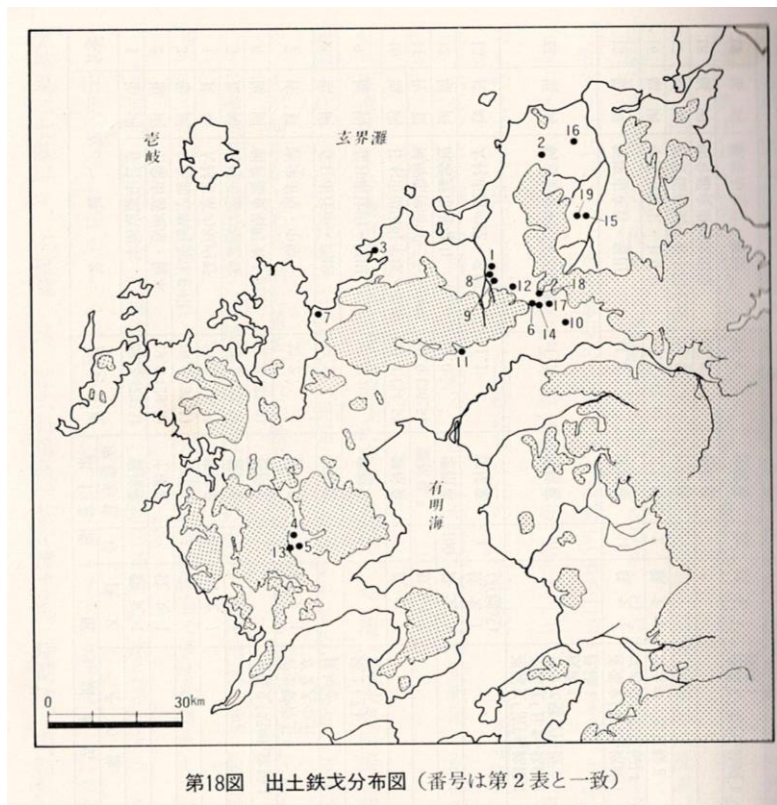
いずれにしても、栗山遺跡は下座郡を統括する王——しかも女王を埋葬した墓であり、夜須の東小田峯遺跡とは別個のクニが存在していたとみられる。

なお、栗山遺跡から鉄戈1本が出土しているが、下表のとおり福岡・佐賀・長崎県の14遺跡から19本が見つかる【平成3年(1991)時点】が、その後安徳台遺跡(那珂川市)からも1本出土している。

( )は復原推定値

番号	遺跡名	鉄戈全長	出土遺構		棺内副葬品		棺外副葬品		時期
			埋葬形態	号	鉄戈	その他	鉄戈	その他	
1	福岡 春日市須玖岡本	23.2 (23.3)	甕棺墓		鉄戈 1				中期後半
2	福岡 宗像市富地原・梅木	29.2 (29.5)	土塚墓		鉄戈 1				中期後半
3	福岡 糸島郡志摩町御床松原	19.0 (31.1)	?						?
4	長崎 大村市富の原内野	30.3 (31.9)	甕棺墓	23	鉄戈 1				中期後半
5	長崎 大村市富の原常盤	32.2 (32.5)	甕棺墓	2	鉄戈 1				後期初頭
6	福岡 朝倉郡夜須町東小田峯	22.0 (33.0)	甕棺墓			連弧文「昭明」銘鏡 1	鉄戈 1		中期後半?
7	佐賀 唐津市原・中原	33.2	甕棺墓	7	鉄戈 1	碧玉製管玉 9 ガラス小玉 1		鉄戈 1	中期後半
8	福岡 春日市辻田・門田	33.2	甕棺墓	27		鉄剣 2	鉄戈 1		中期後半
9	福岡 春日市辻田・門田	33.9	甕棺墓	24		鏡 2 (?) 鉄剣 1	鉄戈 1 (有樋式)		中期後半
10	福岡 甘木市福田町平塚・栗山	30.4 (34.5)	甕棺墓		鉄戈 1				?
11	佐賀 神埼郡神埼町二子・山崎	30.0 (36.5)	甕棺墓?		鉄戈 1?				?
12	福岡 筑紫野市道場山	39.0	甕棺墓	100	鉄戈 1				後期初頭
13	長崎 大村市富の原・常盤	41.1	甕棺墓	4	鉄戈 1 (有樋式)				後期初頭
14	福岡 朝倉郡夜須町東小田峯	41.7	甕棺墓	10		連弧文「清白」銘鏡 1 連弧文「日光」銘鏡 1 ガラス璧片円板 2 鉄剣 1 鉄鏝 1	鉄戈 1		中期後半
15	福岡 飯塚市立岩・堀田	41.8	甕棺墓	34	鉄戈 1	連弧文「日光」銘鏡 1 ゴホウラ製貝輪 14			中期後半
16	福岡 中間市植生・上り立	40.5 (42.8)	箱式石棺墓	2	鉄戈 1	ゴホウラ製貝輪 8			中期後半?
17	福岡 朝倉郡夜須町東小田七板	43.0	住居跡						中期末
18	福岡 朝倉郡夜須町吹田原	44.8	甕棺墓				鉄戈 1		中期後半
19	福岡 飯塚市立岩・堀田	49.6	甕棺墓	35	鉄戈 1	連弧文「清白」銘鏡 1 鉄剣 1	ガラス製管玉 30~40個		中期後半

第2表 出土鉄戈一覧表 (藤田等「鉄戈」を参照『東アジアの考古と歴史』中所収、一部改変)



第18図 出土鉄戈分布図 (番号は第2表と一致)

### (3)小隈小塚本遺跡

鉄製直刀二本が石棺内から出土。

### (4)小隈宝溝遺跡

鉄剣一本が石棺内から出土。

### (5)小隈ヤシキ遺跡

鉄の鉈(やりがんな)一本が箱式石棺内から出土。

### (6)小隈原田八幡宮遺跡

鉄剣一本が石蓋土壙墓から出土。

### (7)平塚二塚遺跡

大型石棺から板状鉄斧が出土。また、棺の床石の下から鑿(たがね)二本が出土。

### (8)大願寺遺跡

箱式石棺から鉄矛一本が出土。また『小図小言』という文書によれば、「張氏作」の三角縁五獣鏡が出土したという。

安本氏は「この遺跡は、邪馬台国時代から古墳時代にかけてのものであろう」とされる。

### (9)神蔵(かんのくら)古墳

「天王日月」銘の三角縁獣文帯四神四獣鏡が一面、鉄剣二本、鉄斧一つ、鉄鍬先一つが出土。

このほか、石室盗掘坑内から鉄剣一本、墳丘の盛土中から鉄斧一つ、鉄鍬先一つ出土。

### (10)平塚垣添遺跡

弥生後期の溝からヒスイの勾玉が出土。

## 安本美典氏の総括

そして、安本氏は『邪馬台国への道』(梓書院)において次のように総括される。

「吉野ケ里遺跡からは、有柄細形銅剣をはじめ、これまでに、銅剣・銅矛が十本以上出土したといわれる。また、細形銅矛の石製鑄型片も出土している。しかし、そのほとんどが、細形銅剣・銅矛であり、また甕棺墓から出土しているものもかなりあることなどからもうかがえるように、金印奴国時代のものである。西暦紀元前後のものである。邪馬台国時代よりも、数百年まえのものである。

吉野ケ里遺跡からは、刀子(ナイフ、小刀)はでていないが、鉄剣・鉄刀・鉄矛は出土していない。

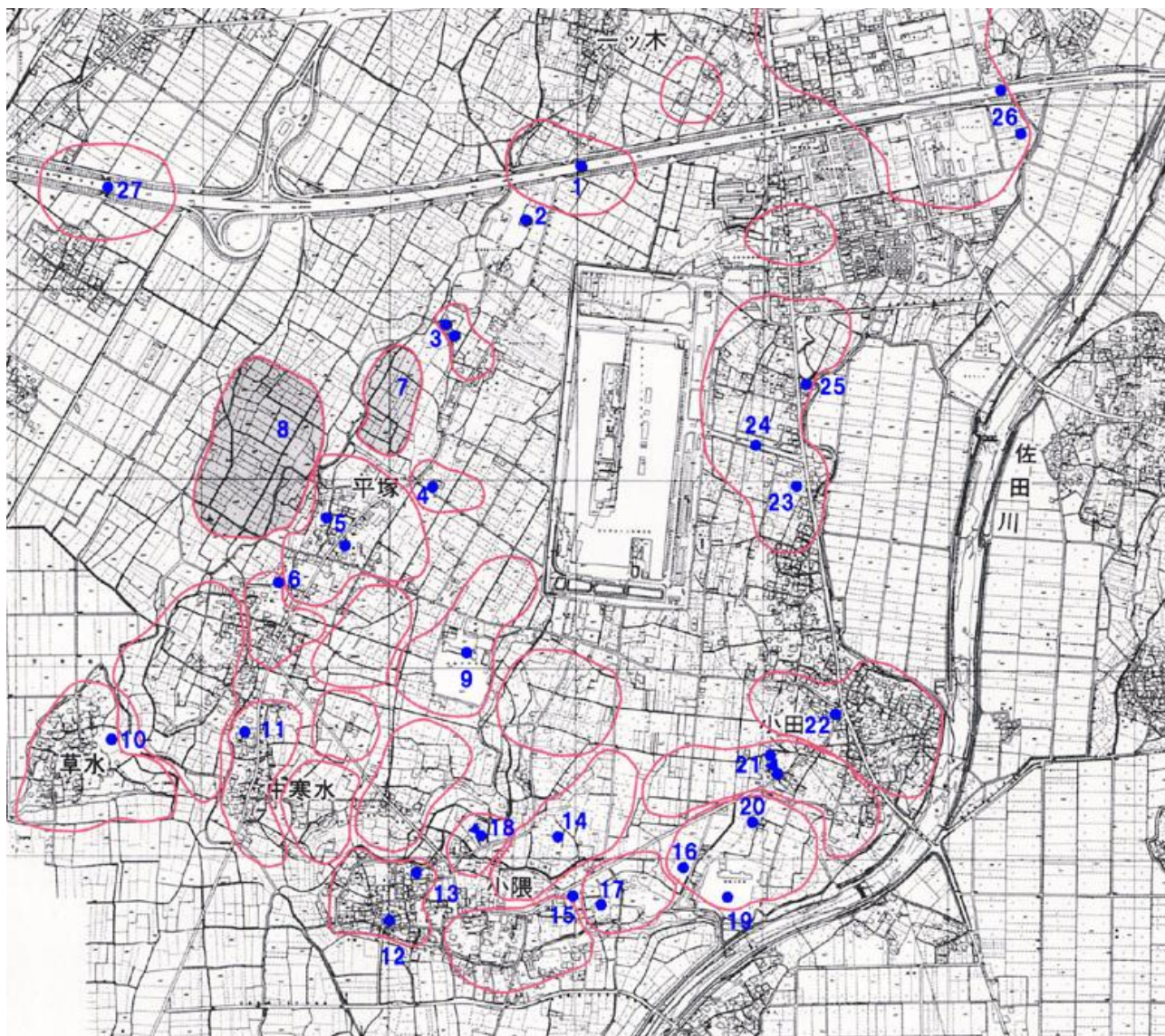
これに対し、一ツ木・小田台地からは、すでに、ほぼ邪馬台国時代のもものとみられる鉄剣二本、鉄刀二本、鉄矛一本の計五本出土している。邪馬台国時代のものにしぼるならば、一ツ木・小田台地は、全面的発掘をみていないにもかかわらず、吉野ケ里遺跡をはるかに上回る遺物が出土している。一ツ木・小田台地は、女王卑弥呼の墳墓の地の有力な候補地のひとつといえよう」

これに対し、小郡市埋蔵物文化財調査センター所長の片岡宏二氏は『邪馬台国論争の新視点』(雄山閣・2011)のなかで、

「この平塚川添遺跡をもってして、邪馬台国甘木説が声高に叫ばれることがある。しかし、私たち地元の発掘調査員のなかではこの地区の中心が東側の小田・平塚遺跡群であることは常識となつ

ている。平塚川添遺跡は、その遺跡群の一部であり、むしろ川端正夫がいうように、主体となる小田・平塚遺跡群の西縁に形成された張り出し集落であって、「新耕の地」と解釈されるのである。

母体となる小田・平塚遺跡群の一部である平塚川添遺跡の東台地上にある平塚山の上遺跡は、遺跡の一部の調査であったが、二・四五ヘクタールの調査区の中なかで、弥生時代後期中期ごろから住居の建設が始まり、古墳時代前期初頭までの間に総計二一三軒という膨大な数の住居と一六八棟の掘立柱建物が建てられる。この住居跡の密集度がそのまま東の台地一帯に続くとなると空恐ろしい集落になってしまう。時期別の住居の数を比較すると、時代が下がるにつれてその数を増し、最後の古墳時代前期初頭で最大になりながら突然消えてしまう。なにもここだけの現象ではなく、蒲原宏行が佐賀平野でも分析しているように、「この段階で筑紫平野の集落は突然姿を消してしまう」と総括されている。





### 一ツ木・小田台地(朝倉市)の主要遺跡

1	一ツ木下原	弥生中	集落・墓(土坑)	
2	一ツ木	弥生中・後	集落・墓(カメ棺・石棺)	
3	平塚大願寺	弥生中～古墳初	集落・墓(石棺・方形周溝墓)	石剣・三角縁神獸鏡?
4	平塚二塚	弥生末～古墳前	大型箱式石棺5基	鉄挺
5	平塚栗山	弥生中～古墳初	墓(カメ棺墓、古墳?)	鉄戈・貝輪・絹織物・鉄鍬・前漢鏡・三角縁神獸鏡?
6	平塚垣添	弥生中・後	集落・墓(カメ棺)	硬玉(ヒスイ)製勾玉
7	平塚山の上	弥生後～古墳初	集落・溝	鉄鍬・鉄鎌・鉄斧・鉄鑿・鉄製鋤先・ガラス小玉・炭化米
8	平塚川添	弥生中～古墳初	集落・墓(小児墓)	銅矛耳・後漢鏡片・仿製鏡・貨泉・木製品(農具・建材)・炭化米
9	平塚小田道	弥生後～古墳初	集落・墓(カメ棺)	鉄鍬・鉄鎌
10	馬田草水	弥生～古墳	散布地	
11	中寒水屋敷	弥生中・後	墓?・大溝	中国式銅剣
12	小隈宝満	弥生後～古墳	集落・溝・墓(石棺)	
13	小隈出口	弥生後～古墳前	集落・墓(カメ棺・石棺)	小丸石
14	小隈夏山・松山	弥生後～古墳	集落・建物	鉄鍬・鉄鎌・鉄鉋
15	小隈屋敷	弥生後	墓(石棺)	鉄鉋
16	小隈小塚本	古墳前	集落・墓(カメ棺・石棺)	鉄刀2(直刀)
17	小隈原田八幡宮	弥生後	墓(石蓋土坑)	石剣
18	小隈神蔵	古墳前	集落・前方後円墳	土師器、三角縁神獸鏡・鉄剣
19	福田小学校	弥生後～古墳前	墓(石棺)	
20	小田小塚本、小塚	弥生後～古墳前	集落・溝・墓(石棺)、古墳	鉄刀、仿製珠文鏡・馬具・瑪瑙管玉・ガラス管玉
21	小田茶臼塚	弥生後～古墳前・中	集落・大溝、前方後円墳	冑・短甲・鉄矛・四環鈴
22	小田正信	弥生後～古墳初	墓(カメ棺・石棺)	
23	小田南出口	弥生中	墓(カメ棺)	
24	小田集落	弥生前・中～後	集落・土坑	石剣・石斧・炭化種子(米・小豆?緑豆?)
25	小田童子丸	弥生中～後	墓(カメ棺)、散布地	
26	屋永西原	弥生中・後～古墳前	集落・大溝・墓	鉄鉋、石戈、蛤刃石斧
27	上上浦	弥生後、古墳前	集落・溝	鉄斧・陶質土器

以上が、平塚川添遺跡をはじめとする一ツ木・小田台地の遺跡状況である。

考古学的にみれば、平塚川添遺跡は「新耕の地」であり、卑弥呼がいた宮殿ではない。本体部は一ツ木・小田台地にある。

しかしながら、一ツ木・小田台地においても、これまでのところ、卑弥呼あるいは邪馬台国に直接結びつくような遺物・遺跡は発掘されていない。纏向遺跡に匹敵するような予算が計上され、国・公共団体・大学などの連携による長期にわたる計画的な発掘調査が実施されるならともかく、現状の人的体制と乏しい予算では、残念ながらあまり期待が持てそうにない。

そして、よくみると、下図のとおり、一ツ木・小田台地は北方の古処山からせり出した山塊(大平山・安見ヶ城山)あるいは丘陵の南部の先端部分に過ぎない。



また、大平山(315メートル)・安見ヶ城山(296メートル)の南麓一帯も、カメ棺墓・石棺墓群などの密集地である。

**(1) 菩提寺丸山公園忠霊塔敷地遺跡**

石棺群があり、鉄矛一本、鉄刀一本が出土。

**(2) 堤遺跡**

石棺から鉄剣一本が出土。

**(3) 瓢箪山遺跡**

箱式石棺から小型仿製鏡が一面出土。





先に紹介した片岡宏二氏の『邪馬台国論争の新視点』には、

「また屋永西原遺跡では、環濠が発掘されたが、平塚山の上遺跡でも丘陵の端に環濠の一部と考えられる大溝がめぐっている。おそらくこの環濠は、遺跡群を大規模に囲繞し、今まで別遺跡として認識されていた遺跡を越えてつながる環濠になるのであろう。川端正夫はこの遺跡群を台地の南半と考え、その規模を東西約一・五～二キロ、南北約三キロの約四五〇ヘクタールと推定する。四五〇ヘクタールという奴国国邑の須玖岡本遺跡群の四・五倍、戸数も奴国二万戸の四・五倍とすると、九万戸もの規模になってしまう」

と書かれている。

厳密に言えば、川端氏は 1.5 キロ×3 キロ＝450 ヘクタールと手堅く計算されているが、吉野ヶ里遺跡の外濠に囲まれた範囲が約 40 ヘクタールであることを考えると、一つ木・小田台地遺跡群がいかに大規模であるか理解できるであろう。

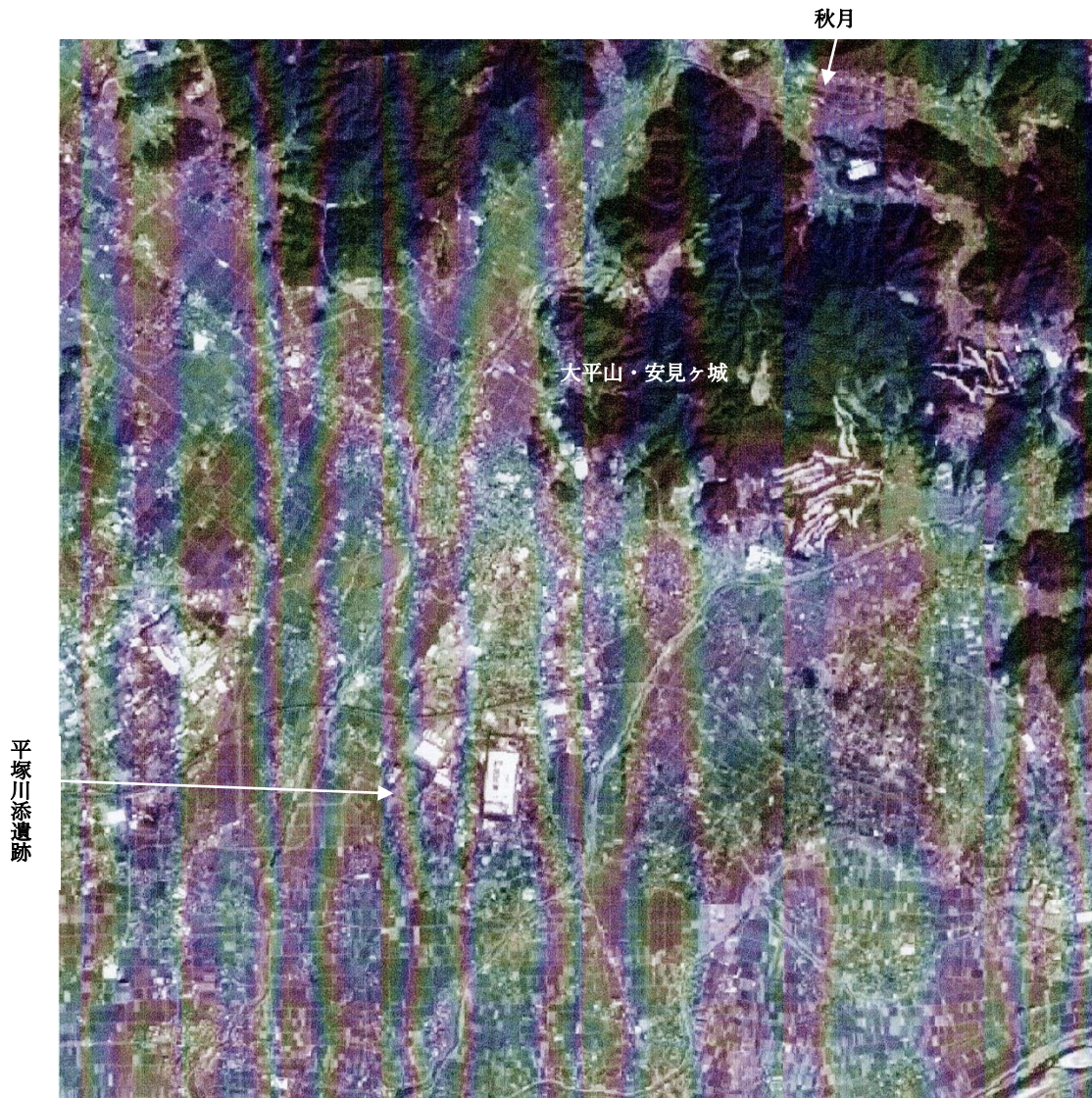
ところが、それにはとどまらない。一つ木・小田台地は北側の古処山・大平山・安見ヶ城山の山塊から延びた「甘木丘陵」の先端部に過ぎない。甘木丘陵全体としては、

(A) 東西約 1.5 キロ×南北約 4 キロ＝約 600 ヘクタール

(B) 東西 4 キロ×南北 4 キロ＝約 1600 ヘクタール

(A) + (B) = 2,200 ヘクタール

となり、筑紫平野でも最大規模の丘陵地となる。



もし、甘木丘陵に邪馬台国の拠点があったとすれば、南方のツ木・小田台地を中心とした区域に一般住民が居住し、北方の大平山・安見ヶ城を中心とした高台に卑弥呼の宮殿があった可能性も考えられよう。

しかしながら、この甘木丘陵の南北のいずれの区域からも、いまのところ卑弥呼の「径百余歩(140～150メートル)」に相当する墓は見つかっていないし、「親魏倭王」の金印など卑弥呼や邪馬台国と直接結びつく遺物や文書なども出土していない。

現時点においては、吉野ヶ里遺跡とおなじく、邪馬台国としての証明は果たされていないというしかない。

ただし、甘木丘陵全体の規模・地形、邪馬台国時代と重なる遺跡・遺物の状況などからみて、筑紫平野における邪馬台国の最有力候補地の一つであることはまちがいない。

福岡地域の奴国、糟屋郡の不弥国との近接性も指摘できよう。宝満山から甘木(丸山公園)ま

で約 15 キロ、不弥国(宇美)から約 21 キロ。普通に歩いて一日、ゆっくり歩いて一日半の手ごろな距離といえる。いざというときに迅速に対応することができる。

前述したように、一ツ木・小田台地を含めた甘木丘陵全体の大規模な調査が行われれば、確実にその証拠が見つかる可能性が高いと考えているが、残念ながら、近畿説に傾いた古代史・考古学界の状況からみて、そのようなことを期待するのは無理かもしれない。

### 朝倉郡

ところで、旧甘木市の東には旧朝倉町・旧杷木町、さらにその東に朝倉郡東峰村(旧小石原村・旧宝珠山村)が控えている。

とりわけ、斉明天皇の「朝倉橘広庭宮(あさくらのたちばなのひろにわのみや)」——通称「朝倉宮」(旧朝倉町・旧杷木町)はきわめて重要である。何ゆえ、斉明天皇はこの地に「朝倉宮」を置いたのか。

そして、この地に何ゆえ、天照大神を祭る「麻氏良布(まてらふ)神社」が存在するのか。

それらの謎に迫ってみたい。

(以下、つづく)